

三つの再会



父の一周忌の法要と息子と娘の引越などあって、久しぶりに上京した。引越しは午前中に終わる筈で、夜は長男と次男が送別会をするという。間に四時間ほどの暇が出来た。私は大学時代の同級生と高田の馬場で落ち合うことにした。そして駅近くのコーヒ―店に入った。

私は、当時「国史」といつていた日本史専攻で、一年生の時中世史の研究会のグループに入った。近世史、近代史に比べて地味な存在で僅か三人だったが、彼はその一人であった。昭和二十年代の終わりの頃のこと、術書も手に入り、夏休みにグループ全体で「将門記」を読み会つことになつて、テキストは皆で分担してガリ版を切つて刷ることにした。二人の担当分を刷るとき、彼はちゃんと軍手を持参していた。随分きちようめんな坊ちゃんだ

など内心思った。まだ物資の不足していた時代のことである。

早稲田実業の教師の道に進んだ彼は、今は母校の大学の講師でもある。しかし二人でお互いの身内の話や世間話などをしたのは、今回が初めてだった。彼は信州に疎開して、松本深志高校に入学していたとのこと。なんと私の故郷諏訪とは塩尻峠を隔てたばかりのところである。また私の父が梵文学者だったという、彼の親戚に破格な女子梵文学者徳永茅生が嫁して来ていたという。茅生はドイツに単身留学して、帰朝してからは父の師荻原雲来博士に師事していたとのこと、きつと二人には接点があったに違いない。父母から感心な女性という話を聞いたようなかすかな記憶もあるような気がして来る。

本当に新しい発見と驚きの連続であった。その彼も来年は高校を定年退職するという。その後には鹿児島にも来て下さること、徳永茅生についての資料を送つて下さることなどを約して別れたのだった。

法要も終わり再び東京に戻つて西国分寺の長男の

所に泊まった。鹿児島に帰る前に一日フリーな日を取っておいた。疲労を考えてのことだったが、大丈夫そうなので、前夜所沢の友人に電話をかけた。彼女とは四十年前、同じ公団住宅に住んでいて、毎日子供と向き合っただけの生活の中で、英文のリーダーズダイジェストを読み会っていた仲であった。

午前中なら会えるとのこと、国分寺に十時に待ち合わせた。駅ビルの七階であんみつを食べながらのおしゃべりである。思えば、知り合っこの方、ずっと彼女の方が経済的にゆとりがあつて、私はいつもご好意に甘えてばかりであつた。

もう十五年も前になるだろうか、ご主人がF銀行の西ドイツ支店長をなさっていた時、一週間ほどお邪魔してあちこち案内していただいた。その温かい配慮と楽しい旅の思い出は、私の宝石のようなものである。デュッセルドルフの高いテレビ塔の回転レストランでライン河を見下ろしながら、異なつたベリーのケーキを分け合つて食べたその味。暮れなずむアムステルダム湾に係留されている帆船の間を

ゆつたりと縫つように進む遊覧船の心地よさ。慌ただしいツアーでは決して味わえない思い出である。

高齡のお姑さんもお亡くなりで、ご自身もご病気がちだったが、今はお元気そうで、三年前とお変わりない。シルクのくすんだパープルのコートも品よくお似合いである。ご主人はF銀行の取締役から〇電機の重役にお替わりになつていたが、何うと現在は副社長とのことである。勿論有能なればこそではあるが、その温かく優しいお人柄が認められない筈はない。思い出せば、西ドイツではブラッセルまでドライブして下さつて、途中ワートルローの戦場跡も案内していただいたのだった。道行く人に窓から「ナポレオン、ワートルロー」と叫んで聞きながら、お昼近くに彼女と別れて、もう何十年もお会いしていないある方を訪ねようと決めた。それは父の恩師のご子息で、私が大学受験時代の一時期お世話になつた方である。長いこと意識の底にあつたその方を思い浮かべたのは、今回父の法事のあと、お座主賞を戴いて大学を卒業した三男と比叡山にご挨拶に

伺ったことから始まる。父の恩師で梵文学の世界的な学者だった荻原雲来博士の授業が大変厳しかったとお座主になられた渡辺恵進師が語られて、ふとそのご家族を思い浮かべたのだった。

私の「貞(てい)子」という名前は、荻原博士の奥様がつ様が、「女の子が生まれたら付けたいと思っていた名前です」と言われて私に下さった。博士はその後三年ほどでお亡くなりになった。戦後の混乱期、奥様は三男のご子息と梅ヶ丘にお住まいだったが、脳血栓であるうか、倒れられて視力と記憶に障害があるようになられていた。そんな中を予備校に通う私のために一部屋提供して下さいだったのであった。それは二カ月ほどであったが、その時の若奥様のお仕事ぶりが、結婚後私のよいお手本になった。七才と五才のお人形のように可愛いお子様はとも利発だった。成城学園の小学校二年生のお嬢さんに胡瓜を英語ではキューカンバと云うんだなんて私の方が教わってしまった。

梅ヶ丘の駅を出ると、駅前はずっかり変わっ

て歩けども歩けども分らない。食堂に入って昼食をとり、そこで電話帳を借りてお電話する。「貞子です」というと、もう四十年以上もの長い御無沙汰なのに、「ああ貞子ちゃん」と昨日お会いしたみたいな明るい奥様のお声にふと涙が出た。

「そこは反対の方角よ。ともかく駅に戻っていらっしやい。すぐ迎えに行きますから」

とのことで振出しに戻る。少し前からの雨が本降りになつていた。反対の坂道を小走りに下りて来る奥様はすぐに分かった。グレーのレインコートにすらりとした長身を包み、お髪が白くなられたが、外人のように素敵である。お宅は改築されて、お庭に坊ちゃんの家を建てられたとのことで、昔の面影はないこまめに植えられたお庭に三つ葉つつじの紫があったピンクが映えていた。

応接間でお茶を戴きながら、ひとしきりおしゃべりをしてふと気がついた。

「ご主人はどうしていらっしやいます?」

大手の経済誌の記者をされていたハンサムな先生

のこ息は、隣接した部屋の衝立の奥のベッドに横になつて居られた。少し半身がご不自由になられたが、今更ハビリ中とのことだつた。やはりにかみながら、にこやかに再会を喜んで下さつた。

学生時代にいらつしやつた昔の私の家の庭の泉水などよく覚えていと言われた。当時小学校五年生だつた私は、三年生の弟と霧ヶ峯にご案内すると出かけたのだが、くたびれたといつて拗ねる弟に仕方なく途中で帰つて来たことがあつた。その折の後ろめたかつた気持ちも思い出した。

お二人の変わらぬ温かさに接して、 帰途はほのぼのとした思いにもかかわらず、何故か涙が溢れそつであつた。

(平成9年5月)